定価一部100円
第293号　昭和44年11月10日発行（毎月10日発行）

昭和44年（1969年）
11月号（No. 293）
社団法人　日本山岳会
（J. A. C.）

目　次

本　文
エベレスト登山隊本部開設…… 1
エベレスト通信②…… 1
石田吟松氏の画文集…… 3
青葉山…… 3
新・釜蘭土雑記③…… 4
アルゼンチン中部アンデス登山…… 5
アルバマヨ付近の高度…… 5
東海支部マカルー調査隊…… 6
グリーンランド1969年…… 6
図書紹介
日本山岳研究……加納　一郎… 7
新版アルパイン・ジャーナル…… 7
カナディアン・ジャーナル…… 8
図書室便り
新刊図書受入報告…… 8
定期刊行物受入報告…… 8
図書委員会報告…… 9
会務報告
10月理事評議員会…… 9
北海道支部設立報告…… 9
女子指導者研修会報告…… 9
新入会員……10
ルーム日記……11
会員異動……11
その他
日本学生山岳連盟設立総会……11
岡部さんへのお見舞金募集……11
山岳広告のお願い……11
年次晩餐会とこの一本展…… 3
あとがき……11

エベレスト登山隊本部開設

会長　三田幸夫

本会のエベレスト登山については、昨年来、エベレスト委員会が中心となり、その下部機構としてのエベレスト登山準備委員会によって準備がすすめられてきたが、本隊の準備も本格化する十月を迎え、旧エベレスト委員会を発展的に解消し、新たにエベレスト登山隊本部を設置して隊を組織することになったので、その経緯ならびに新体制につき説明することにする。

九月二十四日午後、糖業会館において開催された拡大エベレスト委員会（横、松方、三田、日高、吉沢、島田、加藤、村山、辰沼、大塚、松田、飯野以上十名出席）において、本隊の準備のすすめ方につき検討を行ない、エベレスト委員会を拡大していく方法をとるか、エベレスト委員会を解散して登山隊本部を設置する方法とするかの二案が出、これを更に、九月三十日、国際文化会館において松方、三田、村山等で検討した結果、本隊の準備を効果的に行なうためには、エベレスト委員会を解散し登山隊本部を設置したほうが良いとの結論に達した。

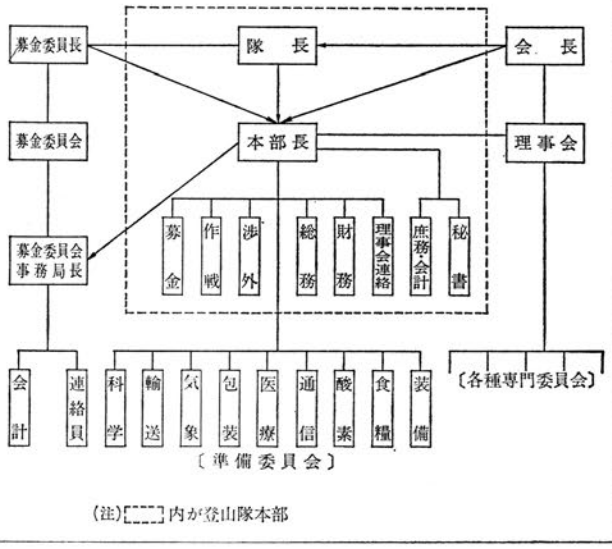
この点についてはエベレスト委員会の承認を得たのち、十月二日開催の定例理事、評議員会で了承を得、さらに本部長に加藤泰安氏を推薦すること、および、本部のメンバー人選については加藤本部長に一任することの了承を得た。

この理事会の決定にもとずき、加藤本部長は直ちに登山隊本部の組織にかかり、本部員には辰沼広吉（理事会との連絡、以下カッコ内は任務分担）、村山雅美（募金）、大塚博美（総務）、松田雄一（渉外、庶務）、飯野亨（経理、財務）、高橋進（作戦）、浜野吉生（作戦）の七名を選任、本部長のスタッフとして加藤本部長を補佐することになった。登山隊本部としての意思決定は、勿論加藤本部長が行うことになる。この点につき十月十七日第一回本部会議を開催し三田が出席、加藤本部長から説明があり、本部員一同了承の上、ここに登山隊本部が発足した。

登山隊本部と理事会、募金委員会等との組織上の関係位置はエベレスト登山隊本部組織図の通りであり、今後具体的な準備については、登山隊本部の実行機関である準備委員会がその任に当たることになるが、今後とも会員各位の一層のご協力をお願い致したい。

なお基金委員会の事務局長には村山雅美評議員が推薦され、理事会の了承が得られたので、今後は村山氏が中心となり募金委員会を組織し、募金を行なうことになった。「エベレスト登山募金のお願い」は山二六二号でお願い致したように、なにとぞよろしく御協力賜わるよう重ねてお願い申し上げます。

エベレスト登山隊本部組織図
（44. 10. 17）



エベレスト通信②

—第二次偵察隊報告—

偵察隊長　宮下秀樹

〔第六信〕九月七日付　バンボチェにて、九月五日、朝からかなり強い雨が降り、覚悟はしていたもののキャラバンのスタートは仲々厳しい。予想外に荷物が増え、八三名分の荷物となる。半日ではポーターが集まらず、七個残したまま七時半頃より徐々に出発。ヒラリーの学校のあるカルカを過ぎ、ズードコシ沿いに下る。一次の折りのキッチンポーターのアンツェリンの家で腹ごしらえをしてナムチェの登りにかかる。年寄りと、関取がヒイヒイいって、四時半頃ナムチエバザール到着。キャラバン第一日目にしてはキツイ。ほとんど一日中降りっ放しの中、最後のポーターは真暗な中、八時過ぎに到着。少ないシェルパも若い隊員も大童の奮闘。

九月八日。朝のうち雨が降っていない中を八時半頃よりポーターが出発し始め我々はチエックポストとナムチェ

の General commission への挨拶。峠の上からトラバース気味に下る。ズードコシとイムジャコーラの出合で中食。一時間半位の急坂の、ただし道は南アルプスを思わせるキレイな路を登りきるとタンボチェのゴンパに到着。十一時頃から降り出した雨は一向にあがらず終日雨。今日はポーターも三時には全員到着。ヘッドラマに百ルピーを寄進し、第一次隊の預かり物を全部受取る。夕食はタンボチェのゲストハウス前の草原で植村隊員の摘んだクロバー始め、何だか良くわからない葉っぱの天ぷらが凄くお美味しかった。

目下、頭痛を少し感じているのが半数、あとは食欲もあり一同元気です。

ここタンボチェは全く地上の楽園といわれるのも宜なるかなと思わせます。真青な芝生の周囲は神秘的なゴンパ、クンデ、カンテガ、タムセルク、アマダブラム、ローツェ、エベレストに囲まれた四千mのタンボチェは全く夢のようです。ここで三日間のレストとは、ちょっと東京の方々には申訳ないと思う位。夜雨が続き、真夜中、トタン屋根を打つ雨音にユーウツになります。

九月七日以降のスケジュールは下記の通り。九月十日、百十名のポーターと一緒に二度目のキャラバン スタート。九月十日バロンカルボ着。九月十一日ロブジェ着。ここで二隊に分け植村、サーダー、アンナムギャル、テンジンザンビュア、ソナギャオ（ローカルポーター）ソナ（キッチンボーイ）他のポーターで直接BC入り。九月十三日より本隊合流までBC建設。本隊は十二日から四日間ロブジェで高度馴化。十六日ゴラクシェップ、十七日BC入り。（二十名のポーターと共に）

九月二十日より予定通り行動開始。一方アンドルジェ、ナワンアイラをカトマンズに向け下山させ井上隊のサポート。ダワトンデュップは連絡の行違いによりカトマンズに向けて下山中。途中バサン、ラクパ達と合流して上ってくるはず。ヒマラヤンソサィティで予約した四名のシェルパが実際には一名しか来ず、ミンマツェリンが再びリザーブしたシェルパとこれからのポーター集めにスットビました。

明けがたよりやっと雨が上がり、少しづつ雲が切れて、午前十時には待望のエベレスト頂上付近、ヌプツェの稜線より上の部分、アマダブラムの一部、タムセルクの壁、カンテガの頂上付近がチラッと見えました。昨夜来の雨は付近の六〇〇〇m峰では雪らしく、新雪がかなり覆っています。

エベレストは、まさに真白で、南壁の上部も黒い岩壁はほとんど見えません。凄い山ですね。早いとこ雨足が遠のいてくれれば良いのですが、何ともいえぬ雲の厚さです。今朝やっと悪戦苦闘の末、日本語放送がキャッチ出来ました。ラジオ日本のです。この手紙は多分、明八日カトマンズに向けて出発するアンドルジェ達に托すことになります。

〔第七信〕九月二十日付　B・Cにて

九月八日、朝のうちは晴れ間もあったが、殆んど終日小雨。タンボチェでのレストランびらきにヘッド・ラマにまた招待され、サイン帳を奉呈する。午前中シェルパと野球をやったりし隊員の元気のよいのにビックリしている。

九月九日　荷物の再点検とリバックに終日ついやす。夕方サーダー帰り、全ての手配が終ったことを知る。但しナワン・アイラは父親が病気のためこられないとのことで、代りにギャルツェンという一寸近代的な Thame 出身の若者をローカル・ポーターとして契約。ルクラに残した七個の荷物も夜八時頃雨中到着する。ナムチェ、ルクラよりポーター続々として集まる。

九月十日　朝割合とよい天気にホッとする。気温5℃。七時頃よりポータースタート、丸太を除き九十二名となる。パンボチェまでゆるい下り、それから雲の平らみたいな素敵な草原をイムジャ・コーラの出合いまである。橋を渡り、一寸登るともう広い河原と草原のベリジェの放牧地である。ポーターの宿泊できる小舎の多いベリジェ泊りとする。ルクラのポーター達と違い、とても陽気で強いし足も速い。午後一時全員到着。ここは広々とした芝生の放牧地でとても快適。

ダワ・テンジンがバンボチェで丸太の橋（一本五～六ネパール・ルピー）集めしたが、八本程足りないのでベリジェについてから佐藤（之）をディアンボチェまで買いにいかせる。ここの相場は八から一二ネパールルピーにあがるが、一日の荷上げ賃を考えると割り安になる。

九月十一日　朝、一点の雲もない好天気で、モンスーンあけ近くを思わせるが、午後には再び雨となる。

今日はロブジェまで近いというのでゆっくりでる。一時間足らずでボロンカルボ、チョラツォ氷河との出合から愈々クーム氷河に入る。徐々の登りのため大したことはなく午後一時三〇分頃全員到着。雨が降るとさすがに寒い。（高度四九〇〇m）ロブジェ氷河の押出しにある小さな草原に放牧小舎が一軒あり、正面にヌプツェがどしんと構えている快適な処。クームの奥にはエベレストの西の肩も見出せる。此処で初めて湧水があり、おいしい冷水を飲むことができた。

九月十二日　植村、シェルパ六名、ポーター九十二名で出発。他の隊員とリェゾン、キルケン、アンツェリンはここで四日間の休養と決定。本日をもってサーダー一名、シェルパ九名、ローカル・ポーター八名が決定する。

九月十三日　植村隊は九時BC着。ゴラクシェップより二時間で早いものは十二時半にはロブジェに帰着した。

九月十四日　雨のため一日中天幕の中で滞在。

九月十五日　曇時々雨。全員の調子からみてゴラクシェップ経由一日でBCに入ることにし、ナイケと二日分支払うことで解決。

九月十六日　晴後曇、ゴラクシェップより雪。七時素晴らしい好天の中を出発。直ぐモレーンに入る。一時三十分野球のグランド二つ分位の砂浜とそれに続く湖のあるゴラクシェップ着。もう雪がチラツキだして可成り寒い。以後草もなくなり、ガラガラのモレーンの上をあっちこっちと歩く。ヌプツェ側に渡って有名な幽霊横丁に入る。佐藤（之）等は十一時半についたが年寄連は十四時三十分にBC着。夕方祝杯をあげたが、高度馴化がうまくいっているせいか、たちまち一本が空になった。

九月十七日　二㎝の積雪あり、BCには八時五分、アイスフォール全面は九時になると陽が当り気温がぐんぐん上昇して忽ち雪を融かす。アイスフォール正面に向かい、一〇〇mの基線で右左のポラロイド写真を毎日とって貰うことにするが、さして変化はみられない。午後は雪の定期便。

九月十八日　朝の中ガス後晴。十時頃より一日中雪。晴れ間をみてアイスフォールの検討を行なう。雪崩はブモリ、リントレン方面で一日数十回。ローラより一日二回、ヌプツェより一日一回位でさして危険とは思えぬような感じ。

第一次の春の写真と比較すると相当に違っていて顕著な氷塔など、同じ姿は全然見当らない。

ルートは正面に荒れたセラックス群があり、右、左にルートを避けるわけですが、右手ヌプツェ側は一見中腹までは容易に見える。ただアイスフォールを斜めトラバースするのに危険が感じられ、今回も今までの遠征隊同様、西稜寄りをとることに決定。怖いのは西稜肩上部よりの氷の崩壊と落石であるが、今回の観測では大した危険はない感じで、これならいけるというのが率直な気持です。

九月十九日　曇後雪、積雪のため、アイスフォールの偵察は中止、陽が当ってから宮下以下で第一次隊の取付地点のデポ地まで偵察。下部のルートのおよその見当をつける。十時にカトマンズよりガソリン輸送のためたたせたキャラバンが、シェルパ二名、他十一名で十八日間でBCに到着。九月二十一日にポストランナーをカトマンズに向けることにしたので木村カメラマンは写真の現像に大忙がし、午後は後発隊に指令書をかく。

今後のスケジュールですが、スイス隊のBC入りが十月八日であることからみて余裕がありますので慎重に行動します。

現在は午前十時頃になると定期便のように雪がふりだし一日に五～十五㎝の積雪がある。しかし翌日の朝の日照で十時頃には殆んど消えてしまう。雪崩または、氷塔の崩壊に積雪は殆んど影響なく、自重の他は、温度上昇の方が問題のようです。この年後の降雪が何日つづくか不明ですが九月一杯には終るように思えます。ドクターの検診の結果も大体正常で身体のコンディションが戻りつつあるので（血圧など）これからを期待しています。　以上

梶本徳次郎氏死去　アンナプルナ第一峰偵察のため西ネパール旅行中十月二十九日、カトマンズ西北百六十キロのジョムで病死された。四十八歳。昭和二十一年二月入会、三二四二番。

石田吟松氏の画文集

石原憲治

今から七、八年前上高地でウェストン祭が催されたとき、石田吟松さんが初めて出て来られて、昔のウェストンの話をされた時にウェストンからもらったという長い杖を持って来られたことを出席された方は記憶されているでしょう。その後年次晩餐会に出席されたことがあったりしたので、誰れも会員になっておられると思っていたところ、私が確めて見たらまだ入会されていないということであったので、私が紹介人になって入会手続をとることになった。石田さんに私が近づきになったのは私の近所に伊藤博文の令息が住んでおられて、若い時からの友人として時々上京してそのお宅に泊られるので、その節拙宅に尋ねて来られたり、私も伊藤さんのお宅に訪ねたりしたので、まだ入会されていないのであれば御紹介したいと申し出たわけでありました。

そういうわけで、自然氏の山歴、殊にウェストンとの関係を聴いたところ、次の如き次第が知らされたのです。その文章を石田さんの手紙から写してお目にかけることにします。

『私がウェストン師と有明山に登った時は明治四十五年夏、中房温泉に美術学校の友人五、六人と行っていました時に、八月十四日にウェストン師は中房温泉に夫人を残し、妙義山から連れて来た山案内人と温泉の若主人百瀬彦一郎氏、私、信濃民報社の記者二人計五名で登りました。

このことは昭和三十五年のウェストン祭の時に、横内斎氏（植物学者）が「心」という雑誌第十七巻九月号（昭和三十九年九月一日発行）に「美女平と弥陀ケ原の野鳥」と題して大原総一郎さんが一文をものされている。その冒頭に「奇妙な定義かも知れないが、私は『文化都市』の条件の一つとして、五、六月頃、一時間以内で行ける場所に二十種類以上の小鳥の声を聞くことができる森を持つことをあげる」とあげ、「大都市の中で最も恵まれているのは森の都仙台である。戦前に比べれば様相が変わったとはいうものの、東北大学の植物園に一時間もおれば、優に二十種類を超える鳥の姿に接し、声もきくことができる。そこは青葉城をめぐる自然林で、かつて軍用地だったため立入りできなかったことが幸して、今ではこの意味では大都市中第一級の町ということができよう。市の中央部から僅か数分でこの自然植物園に行くことができる。」と述べておられる。

青葉山

山下久男

私は、今年八月四日、その青葉山に行き植物園をみることが出来た。東北大学理学部付属のこの植物園内にある研究室に、植物学者木村有香氏を訪い、その案内で植物園を観たからである。通称青葉山―それは一四四mの高さしかないーと呼ばれる高丘の一部面積約五〇万平方m（約十五万坪）を占める広大な自然植物園がそれである。かつて第二師団がおかれてその所管であったが第二次大戦後駐留軍が接収していた。昭和三十三年四月、東北大学の管理に移され現学部付属植物園となった。東北大学の所管となり、植物園となるには木村教授は大いに努力されたという。

モミの林が目につく。本沢のモミの木は太平側の北限で、この木は百五十年位経たものである。モミは成長が早いという。木村さんから手渡された「青葉山植物園植物目録」によると「スギナ」から始まり「オニタビラコ」に終わる植物の種類は六六種に及んでいる。この他に蘚苔類が一三七種見出されるという。自然のままに森林がよく保存されているから野鳥類の絶好の棲息地となっている。温帯性の鳥類が主として棲み、カケス、オナガ、ホホジロ、セグロセキレイ、エナガなど二九科七一種が確認されている。鳥類の他にリス、ウサギ、ムササビの類もいる。木村教授は天然自然のままの植物園であるが故に、野鳥も棲み、その声も朝夕、自然そのままにきくことが出来る。その声をききに毎度やってくる市民もいるとぽつりぽつり説明される。私は大原総一郎さんの文化都市の必須条件の一つを今一度考えてみた。そして仙台市民はこういう幸福をもっていることを知った。木村氏は元本会員である。

私とウェストン氏とのことを話してから、色々な方が私宅へ見えました。また日本山岳会でも、ウェストン氏と登山を共にしたことを取り上げられて、三十六年四月の会報に出すなどのことがありましてその後沢山のお知合が出来ました。

私の登山歴を申しますと、大正六年中房温泉から慶応大学の山岳会員市川源一郎氏、清琴氏と下働きの四人で燕岳から大天井、常念、二俣小屋から槍沢におり槍の頂上へ、再び槍沢へ下りて上高地へ下り五千尺に泊りました。

当時の五千尺は二階屋の粗末なものでした。旅館は清水屋と二軒だけで清水屋には西洋人が十名位泊っていましたが、五千尺には私共だけでした。十九日には焼岳へ登り上高地から徳本峠を通って島々へ下りました。当時の燕では大きな岩かげで一晩中たく薪木を切って野営でした。二俣小屋は石を一寸つんで四人がようやく寝る位のところ、そしてはい松で残雪をとかし御飯をたきましたが、御飯がまずかったことを憶えています。

その頃は登山者は少なくすべて泊る場所は夜露を凌ぐよう自分達で作りました。三日間一人の外国人に出逢っただけでした。

途中ワラジの切れた物が落ちていたり、朝日の煙草袋が落ちていると何となく安心感が起る思いでした。

市川、清氏は学生で学生服でしたが私はワラジを七、八足も用意していましたが、幸い雨にもあわず無事でした。

間もなく大陸の写生に出かけようと言う終戦となって昭和二十二年に松本に帰りました。その後穂刈様と知合っていましたので穂刈様の上高地荷物小屋に泊り上高地、焼岳、徳本峠、槍ケ岳など何度も登りました。その後山岳会の方々と御知合になった次第です。』

今年の六月ウェストン祭に石田吟松さんも参列されたが、私も帰途寝覚のお宅を訪ね一夜氏が満州で半生を送られ満州より朝鮮、熱河方面から山海関、北支、中支、南支、揚子江、盧山方面にわたり写生集（和紙綴り一冊三十枚、両面で六十図）のもの約百冊位保存されているといわれ、その内数冊を拝見した。このたびまず満州方面だけをまとめて「満州の風景」を出版されることとなりこの春申込を受け付けられたが、その製版が遅れたため漸く最近出版市販されることになった。

三十年の間半生を満州に暮らし、支那の南船北馬の景観を全情熱をかけて描写されたその業績は実に立派な事業であり、おそらく現代の中国内にも珍らしいものではあるまいか、氏は今八十一歳といわれるが私は一夜いろいろと氏のお話を聞きその作品は何れも写生画で氏独特の点描風の精緻れいろうとして高雅な風韻に満ちているものであった。いずれも小品で、展覧会向きの所謂制作でないところに、かえって氏の独自の面目が覗かれると思われた。支那の四百余州を全部描写しつくそうとした若い日の熱情は私にも伝って来るのであった。

左記出版は直接に申込まれれば定価二千八百円を送料共二千五百円で送り届けられることになっていますから左記に御送金申込み下さい。

千代田区内神田一の十二の十、木耳社内石田吟松画文集刊行会

「満州の風景」定価二千八百円、予約現金申込二千五百円、振替送金、口座番号東京五一一二二番、加入社名、木耳社

年次晩餐会とこの一本展

昭和四十四年度年次晩餐会は十二月五日（金）昨年と同様平河町のマッヤ・サロンで開催します。テーブルにつくのは六時の予定ですが、サロンにバーを設け、四時ごろからお集りいただき懇談の時間を十分とっておきます（会費二千円）。また本会で扱っている茗溪堂その他の図書も割引きで販売し、ネクタイ、バッジ、地図なども即売するコーナーを設けますので御利用下さい。

例年の「この一本展」は、今回はエベレスト登山関係の書物や出来れば資料を集め、展示します。会員各位でこれはという書物や、資料をお持ちの方はお手数でも、書物名、著者名、発行所、発行年月、資料はその品名と、いわくいんねんを簡単にご記入のうえ本会図書委員会までお知らせ下さるようお願いいたします。

なお年次晩餐会の通知はあらためてさし上げますが、出席を申し込まれ不参の場合は必ず事前に御連絡下さい。

新・爺蘭土雑記 ③

藤島敏男

ベン・ローモンド登山　どちらを向いても岩山草山が目にはいる、あやしいまでに青い水を湛えた湖水の、傾斜地に階段状に、青い屋根赤い屋根の重なる、クインスタウンは、北イタリアの湖水地方の旅を、私に思い出させた。町の形容にチャーミングという言葉が許されるならば、そう言いたい町が、クインスタウンである。誰が名付けたのか、たしかにこれはキングスタウンではない。

この町に、大きな店の経営者で、佐藤女史八年前の旧知のおやじさんがいた。御両所が再会を喜んだことは、言うまでもあるまい。ロンドンやバリーならばともかく、N・Zの山中の小さな町へ、八年ぶりで日本から再訪というのは、よくよくの奇縁であろう。このおやじさん、宿のことから、あれこれ万事世話をやいてくれた。

冬はウインタースポーツ、夏は湖水の水遊びというわけで、湖畔にはボートやヨットが群れて、いろとりどり、美しい眺めであった。

このあたりはスコットランドから移り住んだ人達が多いのであろう、山や湖にスコットランドの名をつけたものが、目につく。ロッホナガールという湖、ベン・モーア（五九八七フィート）、ベン・ネビスは英本国の本物を遥かに抜いて、七三〇〇フィートもある。

一月二十五日。若いT、Sの両君は町の西にあたるリマーカブル・レンジのダブル・コーン（六八〇〇フィート）へゆくという。深田、吉田の両君と私は、東南のベン・ローモンド（五七四七フィート）へ出かけた。町はずれのモーター・キャンプ場は、森の中の草原にトレーラー（というのだろう、車のうしろに、小部屋を引張って歩いている）を据えて、みんな家族連れでたのしそうにやっている。若者ばかりの愚連隊みたいなのは、少いようだった。そこをぬけて山道へかかる。柵があって車は通さないが、しばらくは車道が登っている。花が美しいので、吉田君は撮影に夢中だ。深田君とふたりで、車道をショートカットしながら、眼下にひろがる湖水と遠山の美しさを堪能して、登るほどに吉田君とはぐれてしまった。

待てども待てども現われぬ。その頃吉田君の方は、われわれより先きへ登って、待てども待てどもということだったらしい。頂上は遠いが、みえているのだからと、途中でひるめしもすませ、余り踏跡もはっきりしない草付きの尾根を、ガサガサと登っていった。はぐれてから二時間半位たって、大分高いコブの上に人影を認めた。それが吉田君だった。N・Zまできて、草山でおたがい迷子になるとは、と大笑いだった。

頂上は午後三時半。あまり早いお着きとはいえないが、高距千五百mの登りに、道草もくったからやむを得ないとしよう。山上の展望は、足下にひろがる湖水と、その周辺の山々もさることながら、真北にアスパイアリング（九九五七フィート）を盟主とする連峰が、氷河の上に岩をのせて居並ぶ姿は、私達を喜ばせた。この山群だけでも一夏や二夏は、充分山登りがたのしめるだろうとおもったことだ。山名をかいた見取図（銅板）があって、相当人の登る山だろうが、紙屑、空罐は目にふれなかった。

こんな小さい山でも、その頂上からの展望は、永く私の心に残こるであろう。湖畔の宿へ戻ったのは七時、まだ西日がカンカン照りつけていた。若者ふたりは、頂上の手前で時間切れになったが、たのしかったという。

フィヨルドに遊ぶ　N・Z南島の西南隅に、無数のフィヨルドが入りこんでいる一帯がある。フィヨルドランド国立公園がそれである。広さは三百万エーカーとある。地図をみると、長さが大体百マイル、幅が三四十マイルで、ずいぶん広いものだ。全体が深い森林におおわれ、山は氷河をかけているのもあり、湖水があり、渓流が縦横に走っている。それでロクに道もないし、人間の住んでいるところもないという。日本ならば、林道を開発してドンドン伐採というところだが、N・Zではそこまで手がまわらないのであろう。

フィヨルドにしても、車道の通じているのは唯ひとつ、ミルフォード・サウンドだけである。もっともそれが代表的な景観を、もっているということなのかもしれない。

テ・アナウ湖にのぞむホテルの前は、ユーカリやポプラの美事な並木道。そこを抜けると、しばらくは湖沿いに、晴れやかな道、野草の花が美しい。やがて道はエグリントン谷へと導かれ、小暗いほど深々としげった林の中をゆくようになる。稀れに一軒家がポツンとあったのは、森の番人でも住むのであろうか。カスケード・クリークのあたりで谷がひらけて、広い草原に大樹が、まばらにあるばかり、万年雪と小さいながら氷河を抱いた岩山が仰がれた。さしずめ上高地といいたいところだが、風物はもっとすっきりしている。

誰でも車をとめたくなるのだろう、ささやかなモーター・インがあった。私達は静寂とよりいいようのない、眺めをたのしみながら、そこで少しおそい朝食をすませた。こんな山の中でも紅茶の味はよかったし、バターの大塊にナイフをさしてテーブルに放り出してあるのも嬉しかった。さすが酪農の国、とおもったことだ。

ホリーフォードの谷へ急にまわりこんだとおもうと、峡谷は深く、対岸には手強わさうな岩山が、ズラリと立ちならんで、中腹に雲をまとった様子は、とても七八千フィートの山とはおもえない高山相である。地図には山小舎の記号も殆んどないが、登山の対象になっているのだろうか。

ホーマー・トンネルを抜けて、海が近いせいか、霧につつまれた山合いを下ると、フィヨルドは近かった。

フィヨルドは氷河時代、氷河に削られて出来たものらしい。両側は切ったての絶壁で、細く長いところは河のようでもあり、水の静かなのは湖水のようでもある。観光団らしい三四十人の爺さん婆さん達と、遊覧船にのって、海まで往復二十マイル、二時間、刻刻に変化する眺めは珍らしいものだった。晴れた日には、高みに氷河も仰がれるだろうし、空の色をうつして、底知れない深い水の色は、一際美しかろうが、生憎小雨がときどきパラついて、高いところは霧が巻いていたが、それでも結構たのしかった。

フィヨルド左岸のマイトル（Mitre）ピークは、バルトロ氷河にも同名の山があるが、僧正の法冠をいうのだそうだから、山容がよく似ている。標高五五六〇フィート、文字通りの海抜、海面からイキナリ五千五百余フィートは、世界でも有数だという。どこから登るのかしらないが、相当の急傾斜だし、上半分の岩場は中々のものだ。一シーズンに二組ぐらいは登るという話だ。紺碧のフィヨルドを足下に見ながらの岩壁登はん、これはまたメッタにない、変った趣きがあるだろう、とおもったことだった。

タスマン氷河へ　あくる日、西海岸へまわるという平地組と別れて、私達はタスマン氷河のふもと、ハーミテージへ飛んだ。ハーミテージといえば、N・Zでも有数の観光地の筈だが、ホテルとモーター・イン、土産物屋に食料品店、国立公園管理事務所ぐらいのもので、閑散としているのが気に入った。

ホテルに部屋をとってから、みんなで管理事務所へ出かけると、向うからヒゲもじゃの大男がやってきて、「山へ登るのは貴方達か」と、心得たようなことをいう。ハーディ君からの連絡が通じていたのだろう。スイスから夏場、N・ZのA・I・L（アルパイン・インストラクション・リミテッドといっていたが、どういう組織なのかよく分らない）が招いているガイドのひとりだった。

素性がわかったので管理事務所での交渉も、彼に一任、翌日セスナ機で出発することもきめた。

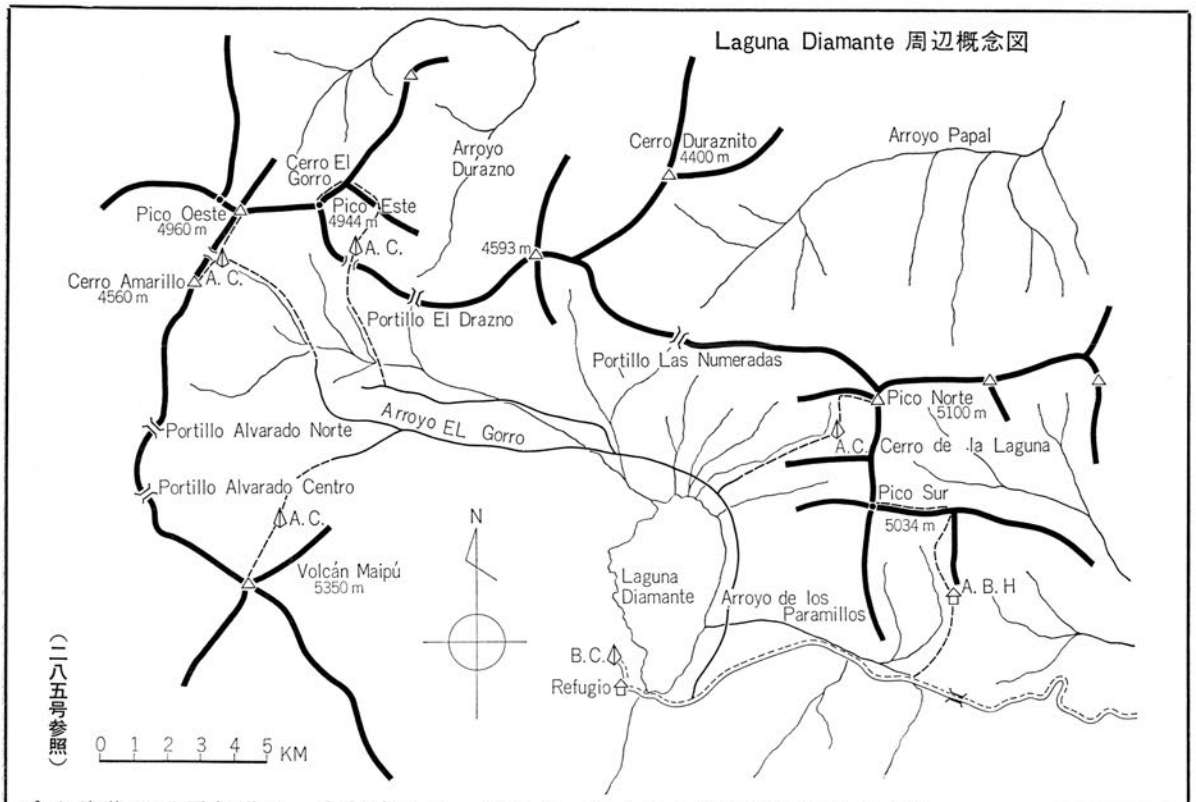
深田君は友人から頼まれた、日本の山岳雑誌を、チーフ・レンジャーに届けたのだが、その雑誌に顔が出ている当人は、いまはいないとの話だった。応待した婦人は、日本の雑誌に知人の写真が出ているのをみて、オーとびっくりしたようだが、必ず届けると約束したから、心配はあるまい。山小屋四泊、五人分の食料買入もすませて、翌朝を約して別れた。　（つづく）

富士山登山技術講習会日程変更

十二月四日から七日までの予定でしたが年次晩餐会が五日にあるので五日から八日と変更しました。五日は午後十時ルーム発となりました。

第二五六回小集会　十一月十四日午後六時半から渋谷日本体育協会三〇一号室で「冬山を前に」のシンポジュームを行ないます。

冬山遭難防止の夕べ　十二月一日午後六時半都岳連主催で豊島公会堂（池袋三越横）で開きます。映画上映。



（二八五号参照）

アルゼンチン中部アンデス登山 II

防衛大学 川上 隆

私達が予想した通り、Rio Topungato（トプンガート川）の増水ひどく渡渉不可能と決定。エナノス山塊の登山を断念する。計画変更のため次の目標について、第一六山岳歩兵連隊幹部と再三にわたり打合せた結果、南緯三四度一〇分。西径六九度四〇分。チリとの国境線上に位置するLaguna Diamonte（ラグーナ・ディアマンテ）周辺の未登峰の登山と決定する。

日本側、登はん隊長、川上隆。隊員、大須賀浩、村田光昭、田尻一実、木村清順、安藤千年、田村真一。

アルゼンチン支援隊隊長A. N. Marquez（マルケス）上級中尉。隊員、下士官（山岳専門家）四名、運転手二名、通信兵その他六名。

一月二十九日、トラック二台にてトプンガートの連隊を出発。パンパをぬけ、起伏の多いステップ帯の高原にさしかかると高度も三五〇〇m前後、だらだらした登りに車の速度もぐんと落ちるころ、三八〇〇mの峠に着く。峠からの眺望は素晴らしく、西側にコニーデ型のVolcán Maipu（ボルカンマイプー）五三五〇mが残照に輝き、ディアマンテ湖にその影を落しこみ、周囲には氷河をいだいた四五〇〇m前後の山々が守護神のようにそそりたっている。峠の南側はラグーナ南峰五〇三四mの南壁が、黒ずんだ氷を標高差八〇〇mにわたってべったりとつけ、登高意欲をそそられる。

ディアマンテ湖の右岸南側の溶岩地末端の砂地、国境警備隊小舎から三〇〇m北寄りの地点にB・C建設。明日からの登はんを決定すべく、川上、大須賀は湖を取りかこむ山々を偵察する。

一月三十日　L・大須賀浩、田尻一実、木村清順、安藤千年、田村真一、北面氷河末端のA・Cより新ルートを開拓、マイプー五三五〇m登頂。

二月四日　L・木村清順、安藤千年。Co. El Gorro（セロ・エル・ゴロー）西峰南稜のコルのA・CよりCo. Amarillo（アマリージョ）四五六〇m第二登。

二月五日　L・村田光昭、田尻一実、木村清順、安藤千年、セロ・エル・ゴロー西峰四九六〇mを南稜コルA・Cより初登頂。

二月五日　L・川上隆、大須賀浩、田村真一。セロ・エル・ゴロー東峰南氷河西側末端のA・Cより、南氷河をトラバースし、ペニテンテスに苦しみながら南東稜をへて、ゴロー東峰四九四四m初登頂。

二月九日　L・川上隆、村田光昭、木村清順、安藤千年。Laguna（ラグーナ）北峰西氷河末端のA・Cよりペニテンテスの密生する西氷河を直登。西稜をへて北峰五一〇〇m初登頂。

二月九日　L・大須賀浩、田尻一実、田村真一、ラグーナ南峰南東小氷河末端にある気象観測小舎より、小氷河直登。東稜をへ南双頭峰五〇三四m登頂。

二月十日、第一六山岳歩兵連隊に帰着、ここに全登山日程を終了する。

◇アルパマヨ付近の高度◇

（A. J. 1969）

John Ricker を隊長とした、カナダ・NZ合同アンデス遠行隊が、コルディエラ・ブランカの北部で活動中（一九六八年）、一行の中の Gerald Holdsworth と隊長のリッカーはそれぞれ、経緯儀と装稜羅針盤（prismatic compass）並びに高度計で測量を行なった。

これによってアルパマヨとタヤパンパの高度が一応、五九七七m、五三九五mとそれぞれに出て来たが、経緯儀による一層正確なものは、アルパマヨが五九四七m、タヤパンパが五六七五mということになった。

前者はE・シュナイダーが測った五九五〇m（今までは一体五九八〇mと思われていた）とほぼ似ているが、一九六二年のAAJ・一六八頁に出ている五九七四mとは可なりの距りがあるようである。（注・従って「山岳」の一九六三年版にある。六一二〇mは勿論高過ぎる）しかしその頃から既に六〇〇〇m級であることには疑問を持たれていたのである。

序でにいうと、一橋大学が一九六一年に初登頂したプカヒルカ北峰は、シュナイダーの地図にある高さより五m減らされて六〇四五m、プカヒルカ南峰はわれわれの想像していた通り、六〇四〇mに落着いたようである。

だからイタリー隊が登って六〇五〇mとしたプカヒルカの中央峰も、今、ホーズワースの作っているタヤパンパ谷の地図（今までのは丸きり信用出来ないという）が出来上れば、きっと六〇〇〇m以下に格下げされることと思う。

いずれにしろ、Nick von Tunzelmann の地図が早くみたいものである。

（吉沢）

カマルー調査隊
東海支部

隊長
松浦正司

一九六九年二月二十四日、松浦、尾崎、山田、小川、生田の五名からなるマカルー調査隊は、ネパールの首都カトマンズに着いた。この日から六月十日までネパールに滞在し、次のような成果を上げた。

一、三月十二日、調査隊の登山許可書を入手した。

二、六月三日、一九七〇年プレモンスーンに行われる本隊の登山許可書を入手した。

三、サーダー二名、シェルパ四十名をヒマラヤン・ソサイエティを通じて雇用契約した。

四、マカルー東南稜六五八〇mまで偵察した。

当支部では、一九六四年、ネパール政府にマカルー遠征のために登山料の半額を支払った。しかし、ネパール政府の突然の登山禁止政策によって実現することが出来なかった。思えば、五年来の宿願がかなった訳である。

一九六八年二月下旬、在日ネパール大使館から日本外務省へ公信が入った。「ネパール政府は登山禁止解除の用意がある。三月中には正式な決定をへて発表されるだろう。しかし、全面的な解禁ではなく、部分的な解禁になるだろう」という内容であった。このニュースに接した当支部は、一九六九年ブレモンスーンにマカルー遠征をやるべく計画し、準備し始めた。

八月下旬、新登山規則が出来しだい、マカルーを含む三十八座の山を解禁すると発表された。しかも、その規則を近いうちに発表するとのことであった。だが十二月になっても新登山規則は発表されず、発表の時期はかいもく見当がつかなかった。そのため、一九六九年プレモンスーンに本隊を派遣することは事実上不可能となった。一九七〇年に本隊を派遣し、一九六九年には調査隊を派遣することに計画を変更し準備を進めた。

調査隊の目的は、登山許可書の入手が第一であり、その他にポーター、シェルパの雇用、マカルーの偵察であった。どの目的も本隊のために必要であり、出来るだけ早く解決する必要があった。しかし、出発時の情勢では、遠征隊という形でネパールに向うことは無謀に近い行為と考えるのが常識であったと思う。ただ、ある程度希望の持てる情報もあった。第一は、一九六八年十二月に提出したマカルー遠征の登山申請書を在日ネパール大使館が正式に受理したことである。これはネパール大使館の大きな変化であり、解禁の間近いことをなによりもよく示していた。第二に、西独アンナプルナ隊が、特例として一九六九年のプレモンスーンの登山を認められたことであった。

二月二十四日、カトマンズに着いて、ネパール政府の担当官と直接交渉するために日本大使館員と一緒にネパール外務省へ行った。担当官に会って、本隊と調査隊の登山許可を出すように依頼した。担当官は、十二月に提出した登山申請書を受取っているといい、それに対する審議を一週間以内に終らせると解答してくれた。翌日も、一国一隊に制限されるかもしれないという日本で得た情報を確めるためにネパール外務省へ行った。担当官は、一国一隊になるのかという質問に驚いて、それを否定するためにいろいろと説明してくれた。それによると一国一隊ではなく、一山一隊ということになる。ただ国による不公平を出来るだけないようにしたいということであった。西独アンナプルナ隊に許可を出したことについては、西独の大臣が来たという説明があった。これは、許可入手のための重要な手掛となった。大臣という一国を代表するような人が来たならば、新登山規則の発表前でも許可を与えたということが判明した訳である。このことは、日本を代表するような機関からの推薦があれば許可入手も容易になることを意味していた。ただちに、日本外務省の推薦状を入手するための手配を取った。担当官が約束した一週間が過ぎても何らの解答も得られなかった。

三月三日、日本外務省はマカルー遠征に推薦状を発行した。このことがあってから、ようやく事態が進展し始めた。担当官は解答が延びている理由を説明した。それは、調査隊に対する規定がネパール政府になかったために生じた問題であった。登山料は山の高度によって定っており調査隊については何らの規定もなかった。調査隊の登山料を定めるためには大臣のサインが必要であった。ところが、大臣が多忙のためサインがなされないままになっていた。この大臣のサインは新登山規則が公表されるためにも必要であることが分った。

三月十二日、ようやく大臣のサインが取れ、新登山規則が発表された。同時に調査隊にも許可がおりた。しかし、本隊の許可書は、調査隊の帰着後に出すということになった。つまり、調査隊が規則違反をしないことが条件な訳であった。これは政府としての当然の慎重さであると思う。

三月十六日、リエゾンオフィサー一名、隊員五名、シェルパ二名からなる調査隊はカトマンズを去り、キャラバンの出発地であるダランバザールへ向った。ダランバザールでポーター三十四名を雇い、三月十九日、キャラバンを開始した。アルン川沿いのキャラバンを続けて三月二十九日最終部落セドアに着いた。セドアでポーターを変えるために一日を要した。三月三十一日セドアを出発した。四月三日キャラバンコースの最難関である四二〇〇mのシプトン峠を越えバルン川へ入った。四月六日バルン氷河上四六〇〇mバルン・ボカリのそばに、ベース・キャンプを立てた。

本隊の第一の目標はマカルー東南稜からの登頂にあるため、調査隊の目標も東南稜の偵察におかれた。東南稜にはサウスコルと呼ばれる六四五〇mの著明な鞍部があり、そこへ向って一本の氷河がベース・キャンプから続いている。調査隊の偵察ルートはこの氷河におかれた。

四月十日、偵察行動を開始した。氷河は下部五〇〇mがアイス・フォールとなっている。四月十三日、アイス・フォールの中の五〇〇〇mにキャンプを立てた。四月十七日、アイスフォールの上五三〇〇mにキャンプ、四月二十五日、五七八〇mにキャンプ、四月二十五日、六二八〇mにキャンプを立てた。四月二十七日と四月二十九日に、キャンプからビバークによって更に上部を偵察し、六五八〇mに達した。悪天のなかを五月三日、ベース・キャンプに帰着した。五月五日から五月七日までの三日間をかけてバルン氷河の本流五〇八〇mまで偵察をすませ、五月九日、ベース・キャンプを撤収した。来た時と同じキャラバンコースを通って五月二十四日ダランバザールに着き、五月二十六日カトマンズに帰着した。

再びネパール外務省と本隊の許可入手についての交渉が始まったが、特別の困難はなく六月三日、本隊の許可書を入手した。六月八日、ヒマラヤンソサイエティの交渉が成立し、サーダー二名、シェルパ四十名を雇用して六月十日全員無事日本へ帰着した。

グリーンランド
――一九六九年――

五月女次男

六月十三日に東グリーンランドからコペンハーゲンに戻ってきました。嵯峨野君はまだアンマサリックにおりますが、七月七日頃コペンハーゲンに帰ってくる予定です。（編者注八月一日帰国）今年は時期がおそかったため、行動面では余り成果はあがりませんでしたが、それでもハスキー（犬橇）の操縦法の習得については所期の目的を達したと思われます。

それでは早速今年のグリーンランドへ入る各隊のニュースをお知らせ致します。

〔春季〕

①イタリーのモンチノ隊

西グリーンランドのヤコブスハウンからチューレまでの犬橇旅行。二月十一日から四月中旬にかけ、二ヵ月を要した大旅行です。これには、デンマーク山岳会から会長のエリック・ホッフ氏と会員のジョン・アナースンが参加しました。モンチーノは数年後にグリーンランドから北極点往復をめざしています。

②スコットランドのシンプソン隊

隊員はシンプソン隊長の夫人を含めて三人で、カナダのコロンビア岬（グランド陸地）から北極を目ざして出発しましたが、無線機の故障と海氷の状態が悪く失敗して帰ってきました。これは二月のことで犬橇を使わない人曳き橇ということだったのですから大変

な計画です。数年の中に再び北極に向うそうです。

③日大隊（早乙女次男、嵯峨野宏の二名）

東グリーンランドのアンマサリックから、北へ三五〇Kmの犬橇旅行。この地域では往復七〇〇Kmの犬橇旅行は日大隊が始めてだそうです。途中ボーラー・ベアに遭遇し、危険を感じ、同行のエスキモーが一頭を射ちました。

〔夏季〕

グリーンランド全域に入る遠征隊は学術隊を含めると五〇隊以上になるといわれます。そこでここでは東グリーンランドのみ記してみます。

①ワトキンス・エキスペディション

アングロ・デンマーク・エキスペディションともいわれ、英国から四名、デンマーク山岳会から二名の計六名、七月一日にアイスランドのレイキャビックから小型機でスコラスベイサウンドへ入り、そこからグリーンランドの最高峰グンビャンス・フィーエ（三、七〇〇m）を目ざします。後援は英国側がフィリップ殿下、ジョン・ハント及び王立地理学協会。デンマーク側はマルガレーテ妃殿下、ヘンリック殿下、それにマイナ・ミケルソンといったものものしい遠征隊です。これが今年グリーンランドへ入る最大の隊でしょう。

②インペリアル・カレッジ隊

隊員六名にてフォーレル峰近くのクリスティアン氷河に入ります。この隊は仲々強いので有名です。

③ロンドン大学隊

ロンドン大学からは、やはり六名、デ・フランセ氷河近くの未踏峰を目ざしています（七月十日～八月下旬）

④オランダ隊

オランダからは、ローヤル・アルパイン・クラブの九名がアンマサリック近辺で登山を行ないます。その中の三名の先発隊とはクルスークの飛行場であいました。

⑤スイス隊

アカデミック・アルペン・クラブの十名が東グリーンランドへ入りますが場所は不詳です。

⑥スコットランド隊

四名でやはり最高峰をめざしています。少し時期が遅いようですが、英国の二隊が競争のような形で入ることになります。

⑦その他

スエーデンと英国から学術隊が二隊入ります。

以上が主な遠征隊の動向ですが、今年の特徴は、犬橇旅行が多いことで、この傾向は今後ますます増えるであろうことが予想されます。ただグリーンランドで犬を使う際の規則が、今年から変更になって、横断に犬を使うことはできなくなりました。ただし海岸線を走るのは問題ありません。

またデンマーク以外の遠征隊にデンマーク人が加わるケースが多くなっていますが、これはグリーンランドの特殊性と考えられます。例えばイタリーのモンチノ隊の場合、イタリア側は、全く犬橇の知識もなく、しかもデンマーク語もグリーンランド語もできないために、デンマーク人を参加させることによって彼ら自身が大いに助かるという訳です。イギリス隊の場合は、最高峰を目ざすので、デンマークに対し敬意を表することと、グリーンランドの氷河の経験者がいないためともいわれています。

相変らずイギリス隊が多いのは驚ろくべきことです。イギリスの国自体は、相当苦しいのにもかかわらず、そんなこととは無関係にグリーンランドにやってきています。さすがは探検の伝統のあるイギリスです。

（コペンハーゲンにて松田宛）

図書紹介

日本山岳研究

今西錦司著

あつかましい題であるが、著者が今西錦司とあれば、たれも文句はいわないであろう。中味は、雪崩の見方、剱沢の万年雪、日本アルプスの雪線や森林限界線、垂直分布帯、イワナとヤマベなど、これまで発表した、山に関連のある論文を集成したうえに、渓流のヒラタカゲロウ一篇を書きおろし、長文の後記、四十年の回顧をそえている。

「ケルン」や「山岳」の誌上で読み、あるいは別刷をおくられてよみ、編集者として、わたしが執筆をうながしたものもあって、再読して感慨ふかいものがあると同時に、それらの論文が、発表されてから二十年たち、三十年をへても、なお生きて光っていることに、今さらながら敬服せざるをえないのである。

「日本アルプスの二、三渓流にて採集せる水棲昆虫について」の卒論をかいたこの著者が「私の自然観」（筑摩書房）「ダーウィン」（中央公論社）「人類の誕生」（河出書房）をあらわすまでの生長ぶりをふりかえって、そのなみなみならぬ資質と、あくことのない究学の道をみる。しかも巻尾におさめられた「四十年の回顧」は、みづからの業績をふりかえりながら、各分野の現況にたいして、きびしい批判の論述をこころみており、定年をすぎての頭のさえと、若々しさをしめしている。

たとえば雪崩の分類について、一九六四年に発表された日本雪氷学会の「なだれの分類名称」を、三十年まえの自説と比較論考して、「これだけ雪崩の多い国に住みながら、わが国の雪崩学の進歩は、このところまことに遅々たるものである」と、現役を叱咤している。わたしは巻をとじるとすぐに、受話器をとって低温研究所の若者をよび出した。

「君、今西君の日本山岳研究を読んだか。」

「いや、まだ読んでいません。いつ出たのですか。」

広告が見えないので、わたしも本を受贈するまで知らなんだくらいだから無理もないが「あれはぜひ読まねばならぬ文献ですよ。低温の人みんなに知らせて、勉強して下さいよ。」

これは著者の、五〇〇山登頂の記念の出版でもある。日本の山岳学の建設に精進して来たこの人は、「書名も考えるところあって、若き日にその完成された姿を描きつつ名づけた」ところを「未完成ながらそのまま用いることにした」といっている。その意気ごみがしのばれる。

たわむれに山に登る人のおおい昨今であるが、まともに山にたちむかい、自然にうちこもうとする人ならば、学究の徒であると否とにかかわらず、これは日本の岳人として必見の書であると、わたしはいう。第一流の学術論文であるが、今西君の筆は、きわめて明快であり、説得性があって、たのしく読める好文である。論文の書き方の手本として見ならってよいものである。学問の仕方についても、教えられるところが多い。

なお私見をかきつづれば際限がない。著者とは長い交友であり、つねに示唆され、激励されてきた間がらであるが、以上にもうしのべたことを、ただの仲間ほめと見すごされないように願いたい。

（加納一郎）

中央公論社五月刊、A5、四〇八ページ、二二〇〇円

新版アルパイン・ジャーナル

AJが今年から一冊になるということは予告でわかっていたが、実際にそれを手にして、その変り方に驚いたのは私一人ではあるまい。

先日編集長のアランから手紙と共にそれが届けられたが、その手紙にはこう書いてあった。

〝立派な地図〟のついているカラコラムの本並びに、私のことと、著書の紹介されている雑誌〝山と渓谷〟お送り頂き深く感謝しております。

沢山に貴重な情報を提供して下さった貴殿に対し、お礼の心から新しく出来たAJを飛行便でお送りしました。新らしい形式の会誌がお気に召すと嬉しいのですが、こちらとしても新しい購読者が欲しいと思いますので、何かに御紹介願えたら幸甚に存じます。

なお、一九六九年の日本隊の活動についてもお知らせ下さい。出来れば十二月末までにこちらに届くようにお願いします。

また、何か特別記事としてあなたが価値があるとご判断されたものがありましたらお知らせ下さい。それには地形的にも立派な写真があればと思います。

家内からも宜敷くと言っておりますが、近い将来再びお目にかかれることを期待しております。

× × ×

内容は主要な一般記録記事が二五項目、AAJの "Climbs and Expeditions" に似た "Climbs and Regional Notes" というのが、世界の山地を一〇地域に分けて整理されていて、この部分は従来のものより非常にわかりよい。このうちのアジアの部分は、Soviet Union, Kohistan, Hindu Kush, Karakoram, Kashmir, Kulu-Lahul, Garhwal, Nepal と七

つに分類され、地図や略図なども数多く納められていて大変理解し易くなっている。HKの部分では私が纏めて報告したのや、倉知君が書いたロッシュゴル（一九六七年）が、何枚かの写真とともに可なり長く掲載されている。

前出の手紙にもある通り、自信のあるものであったらアランのところへ送ってもらいたい。

大垣のシャー・イ・アンジュマンも六行出ている。女性隊のイストル・オ・ナールもあるが、これは訂正を要することがなければと心配している。

一九六七年の新潟隊が、頂上でイタリー（一九五九年）の旗や像を写真にとって来ているにも拘わらず、彼らの登ったのは北峰（七〇四〇m）だと、ビネリなどが言っているように読めるが、これはおかしい。あの写真を方々へ送ってやる必要があるようである。

東部HKの地図が少し修正された鈴木政孝君のを含めて四枚出ているのはよい。

カラコルムではシェルのディランとアレンのマルビティンが略図と共にある。

ヒマラヤは一九六八年のナンガ・バルバットから始まっており、日印婦人合同隊のカイラス峰（五六五六m）のことも勿論見られる。

ムカール・ベーからのパノラマ写真はよいが、写真の方の Muhar は Mukar の方が正しいと思う。一方、エベレストが話題になっていることは当然であるが、スキー隊のことは何も触れていない。JACの南壁（正しくは南西壁と注がしてある）が注目されている。

アラスカのところでは恋籟山岳会のキング峰偵察と植村君の無茶なサンフォード単独登山がある。He strapped long poles to his pack to catch him if he fell into a crevasse, but fortunately suffered no untoward event.

アンデスにはイェルパハーとサルカンタイ、それに栃木のキムサ・クルス山群他、それの地図が一頁分として紹介されているのは愉快である。

GLには日大隊の横断その他が出ている。

「事件、装備、雑記」の項には有用にして参考になる記事が一杯あるが、その一々については紹介しない。

次の、AC内部のいろいろの経過報告もわれわれには興味がある。新型ACJのこと、会合、役員及び委員会、ACG関係、ACの役割、新入会員歓迎とその条件、索引について（本号の索引がもう後ろについているのはよい）。

それから他の山岳団体関係のこと、重要なのは、図書紹介と追悼記。

本号には真先にD・ロバートソンの〝ジョージ・マロリー〟伝が出ている。これは私ももう読んで〝山と渓谷〟の十月号に紹介してあるが、ある意味では非常に面白い本である。"The Alps and Alpinism" と "The Book of Modern Mountaineering" それに "Encyclopaedic Dictionary of Mountaineering" なども出ている。私はこれらを全部持っているが、自分の家にあるのが褒められてあると愉しいものだ。二番目のにある写真は from second-rate to bad とウェストマロットが書いているが、面白い表現だと思う。また、向うの山の辞書でも専門家がみるといろいろアラが出てくるようだ。われわれも鵜呑みにしないよう心がける必要がある。

R・L・G・アービングと言えばマロリーをアルプスへ連れていった先輩だが、この人も去年遂に死んだらしい。ただし追悼記は次号に出るという。

この人の文章はAJには随分出ているし、著書もあるが、私のところには次のようなのがあって、時折参考にしている。

"The Romance of Mauntaineering", 1935, 1946.

"The Great Mountains," 1940, 1942, 1947. "A History of British Mountaineering," 1955.

× × ×

本文の最初にバディーレの直登を書いている Dick Isherwood は、最初に私のAC入会をトリエステから知らせて来てくれた男であるが今はHRのツイIIへ行っている。

次のは昨年のイェルパハーにおける二隊の報告、これは面白い。私がロンドンで会い、今年日本へ来たソ連のトーリアが、共産峰の南壁を書いている。ヘックマイルの〝一九三〇年以来の独墺登山家〟も一読の価値あり。

その他、NZの最近の登山界、クリス・ジョーンズのフィッツロイ等、面白い記事が沢山ある。

なおこの年報の注文先はACの本部がよい。仮綴は三五S、本綴は四五S、宛名は

Alan Blackshaw,
The Hon. Editor of the Alpine Journal,
The Alpine Club,
74 South Audley Street,
London, WI, Y5FF

今までの所と場所は同じだが最後の地名表示が少し違うことに注意。

Canadian Alpine Journal, 1969

今年からACCへ入会した私に、最初の The Gazette がついてしばらくして、CAJ, No. 52, 1969 が初めて着いた。やはりいろいろ世界の登山界の情勢を知るには、他に入手の方法がない限り、出来るだけ主要な山岳会に入っておく方が便利である。

今度のCAJは比較的薄くて一三八頁しかない。しかしその割には内容は豊富である。

今まで十五年間、編集を担当していた Phyllis Munday 女史（六九歳）が引退することは前に「山」で紹介しておいたが、後任が誰であるかということは何処にも書いてない。

内容は本文、雑記と人工登攀、海外会員便り、科学報告、会務、追悼記、図書紹介、新記録と遠征隊、索引ということになっている。

われわれに親しいウォディントン峰のことが注目されるが、昨年は三〇人の登山家が主峰に登ったという。今まで毎年二、三人しか登っていなかった山としては大変な記録で、この中には大阪府岳連の人数も入っている訳である。この記録は簡単ではあるが、三七頁の下に「編者注」として紹介されている。

この山へは今年二月二十一日、冬期初登攀が行なわれた。隊員は米、加合同、夏でさえ人を簡単には寄せつけず、その上悪名高い天候の地域にも拘わらず六人は異常に長い好天に恵まれ、飛行機で山麓に達した。

ナダレには一度もぶつからず、雪や氷や岩の状態もベスト・コンディション、こんなに運のいい隊も珍らしい。

レアル山群のアンコウーマ新登頂（南東稜）もよい記録である。だが筆者はその最後に、自分達の一見たわいもない山への献身が、一日六六セントで一〇時間、一三歳の頃から働らき、三〇歳で珪肺症と結核にかかって死んで行く錫山の労働者達は、一体われわれのことをどう思っているのであろうか、と反省している。

図書紹介のところではまた三番目に、ロバートソンの〝マロリー伝〟がとり上げられている。ここでも推奨すべき本だと書かれている。まあ一度は眼を通しておくべきであろう。

（吉沢）

図書室便り

（昭・44・9）

新刊図書受入報告

新潮社寄贈
(1)新田次郎著『孤高の人上・下』昭・44・9

実業之日本社寄贈
(1)木村殖著『上高地の大将—アルプス暮し四十年の記録—』昭・44・10

加納一郎氏寄贈
(1)加納一郎著『わが雪と氷の回想』昭・44・8　朝日新聞社刊

岸栄氏寄贈
(1)岸栄著『女ひとりのアラスカ』昭・44・8　文芸春秋社

初見一雄氏寄贈
(1)初見一雄著『すこし昔の話』昭・44・8　茗溪堂刊

松田雄一寄贈
(1)日本体育協会広報委員会編『日本アマチュアスポーツ年鑑69』昭・44・3　日本体育協会刊

定期刊行物受入報告

〔部報・会報類〕

(1)『兵庫山岳』No. 28 (44-9)
(2)『京都山岳』No. 532 (44-9)
(3)『名古屋山岳会月報』No. 14 (44-7)
(4)『日本山岳協会会報』No. 14 (44-9)
(5)『O・M・Cレポート』No. 238 (44-9)
(6)『大阪大学山岳部時報』No. 15. (1966～68)
(7)『山嶺』No. 473 (44-9)
(8)『縞枯』No. 1 (1969秋)
(9)『自然保護』No. 87 (44-8)
(10)『低山』No. 50～51 (44. 8～9)
(11)『日本山岳会東海支部報』No. 6 (44-7)

(12)『山』No. 447 (44-9)
(13)『山と雪』No. 137 (44-9)
(14)『雪と岩』No. 21 (44-9)
(15)『京都中体連ワンダーフォーゲル委員会 行事記録』No. 7 (1968年度)

〔山岳雑誌〕

(1)『地図』No. 26 (44-6)
(2)『岳人』No. 268 (44-10)
(3)『HIKER』No. 168 (44-10)
(4)『山と渓谷』No. 373 (44-10)

Journals Arrived in September 1969

1. 『The Alpine Journal』 Vol. 74, 1969.
2. 『Die Alpen』 Jahrgang 45, 8, August 1969.
3. 『Alpinismus』 Jahrgang 7, 8, August 1969.
4. 『Anualio de la Federacion Espanola de Montanismo』 1968.
5. 『Apparachia』 Vol. 37, No. 3, June 1969.
6. 『Apparachia bulletin』 Vol. 35, No. 9, August 1969.
7. 『Der Bergsteiger』 Jahrgang 36, Heft 8, August 1969.
8. 『Rivista mensile』 Anno 90, No. 6, Giugno 1969.
9. 『Deutscher Alpenverein』 Jahrgang 21, Heft 4, Juli 1969.

なお、左記の参考図書を大橋晋氏より寄贈ただき、図書室に備えましたので、充分御活用ください。

(1)中田祝夫編『新選古語辞典』昭・41・5 小学館刊

図書委員会報告

九月十八日 午後七時より図書室
深田、雁部、大橋、稲田、村石、川上、細井、野上

(1)『なだれ』の文献目録が完成し、雪氷学会より来年度出版の予定。次の目標としては『海外登山』をきめている。(川上)

(2)図書交換即売会の件

十月十日までに、リストを寄せていただいた現品を図書室に届けていただく。

P・S No. 4

今年の紅葉は平年より一週間ほど早く、晩秋はかけ足でやってきそうだ。先日、私も剣の麓で周囲の燃えているようなななかまどの大群に魔法にかかったように目をみはった。(満)

会務報告

十月理事評議員会

(二日、本会ルーム)

▽出席者 三田会長、吉沢副会長、松田、山崎、小倉、辰沼、浜野、野上、藤田、飯野、牧野内、大塚、長尾各理事、織内、藤井、折井、沼倉、石原、後藤各評議員

▽議 事

①昭和四十四年度収支予算補正の件 (松田)

四十四年度収支予算歳入の部にエベレスト登山関係特別収入として文部省助成金八百五十万円、報道関係助成金三千万円、募金収入五千万円、参加隊員個人負担金八百五十万円、小計九千七百万円を追加、歳出にエベレスト登山特別事業費一億円を追加する。従って歳入、歳出予算とも合計は一億九百八十二万八千三百二十五円となる。(承認)

②会務分担変更の件 (松田)

飯野理事の自然保護、支部連絡を深田副会長、神河内山荘を折井評議員に分担してもらい、山岳担当の中島理事がエベレストに出発したので、倉知山岳編集委員をその代行として理事会に出席してもらう。 (承認)

③UIAA総会の件 (松田)

十月四、五日プラハで開かれる同総会に田村海外連絡委員に出席してもらうが、今回に限りモスクワ、プラハ間の旅費を本会で負担する。 (承認)

④中華全国山岳委員会発会式の件 (松田)

十月四日台北市で開かれ三田会長に招聘状がきて折井評議員に出席してもらう。会長代行なので旅費は本会で負担する。予算約一万八千円で記念の楯を作り、持参する。 (承認)

⑤会員名儀変更の件 (飯野)

従来日本極地研究会として入会していたが、その責任者である木村義昌氏個人の名儀に変更することになった。 (承認)

⑥エベレスト登山の件 (三田)

現在のエベレスト委員会は改組し、山登りそのものをする人で組織することにし、エベレスト登山隊本部を設けることにした。本部長には加藤理事になってもらい全責任をもってもらうことになった。登山隊本部と会のパイプ役は三田会長が当る。今後は松方隊長、加藤本部長、三田会長の三本建てとしてやって行く。エベレスト登山募金案もご承認いただき、三田会長に一任していただきたい。 (承認)

▽報 告

①年次晩さん会は十二月五日マツヤサロンで開くが、ことしの永年会員は藤島敏男、石井鶴三の両氏、名誉会員は評議員会にお願いする。 (松田)

②学生部が中心となり日本学生山岳連盟を設立、十月四日東大山ノ上集会所で設立総会を開く。事務所は本会ルームを当分の間使用させてほしい。 (浜野)

③婦人懇談会女子登山研修会の件 (小倉)

④箱根現地小集会の件 (川上)

⑤富士山診療所の件 (長尾)

⑥山岳の件 (松田)

⑦山日記の件 (牧野内)

⑧図書交換即売会の件 (野上)

九月理事評議員会議事録追加

九月の理事評議員会議事録に次の項目が脱落していましたので追加します。

・エベレスト登攀隊長の決定について

松方隊長が決めることになっていたが二次偵察隊の選考とあわせ松方隊長の意見を考慮のうえ、エベレスト委員会は候補として大塚博美常務理事を適任者として推薦決定した。本案了承。

北海道支部設立

北海道支部設立については、かねてから地元で熱心な希望があり、七月二十日午後二時から札幌道庁前ビヤセンターで設立総会が開かれた。東京から藤井運平評議員が出席、橋本誠二氏の司会で杉野目浩氏の経過報告があり、支部発足にふみ切った。

今後支部員相互の接触により、さらに支部の形態が明確になるものと期待され、北海道在住会員より積極的な支援をお願いする。

▽設立総会出席者 坂本直行、藤井運平、加納一郎、中野征紀、佐々保雄、橋本誠二、芳賀孝郎、石川正弘、長沼悟、太田敬、井手貴夫、平野明、高橋正、浅利欣吉、中野武司、高沢光雄、酒巻吟一、小林年、杉野目浩、泉亮、阿部淳、塩田輔雄

日本山岳会北海道支部規約

第一条 本会は日本山岳会北海道支部という。

第二条 本会の事務所は札幌市におく。

第三条 本会の目的は会員相互の連絡と親睦を計ることとする。

第四条 支部費は年五百円とする

第五条 その他必要とする事項は支部設立並びに運営などに関する規定を準用する。

支部役員

支部長 中野征紀、総務木崎甲子郎、庶務高沢光雄、同酒巻吟一、会計小林年、会計監事可知邦成

事業計画

①会報の発行(年二回)②連絡会(年二回)③その他必要に応じ会合および講演会などを開く。

事務所 札幌市北十条西八丁目北海道大学理学部地質学鉱物学科内木崎甲子郎方、電話七一一二一一一(内線二七二九)

女子登山指導者研修会

本会と文部省共催の表記研修会は立山文部省登山研修所をベースに、無事終了いたしました。実施にあたってはじめての試みでもあり、不十分な点や今後の問題点など多々ありましたが、文部省、登山研修所の皆さまはじめ、お忙しい時間をさいてご参加下さった講師の方々、会員の皆さまのご助力により、一応の成果を挙げ得ましたことを心から御礼申し上げます。

研修会応募者はほぼ全国にわたって九十五名にのぼり、半数が参加できない状態でありました。今後募集の方法については十分考慮されねばならないと考えます。

▽研修日程

九月二十日 講演『登山の指導について』(槇 有恒)、『女子登山の変遷』(村井米子)、講義『女子登山の現状と今後の方向』(山崎安治)、研究討議

九月二十一日 室堂より班ごとに希望のコースをとって剣沢研修所前進基

地集結、講義『リーダーシップについて』(村木潤次郎)、『登山の医学について』(長尾悌夫)、研究討議

九月二十二日　班ごとに剣岳往復、懇親会

九月二十三日　下山、午後解散

▽参加者　四十三名(北陸線不通のため予定五十名が減少)

▽実技講師　村木潤次郎、広谷光一郎、松永敏郎、長尾悌夫、鹿野勝彦、嵯峨野宏、中村進、神崎忠男、浜野吉生、大倉昌身

今回の研修会において特に問題となったのは、参加者のレベルに非常な差があったこと、および、研修会の趣旨がてっていされず単に技術講習会と考えて参加したものが多かったことの二点である。これは、果して定員五十名の応募があるかどうかの予測が全くできなかったために申込順に受付ける方法を採ったので、連絡のおくれる遠隔地および組織を通じての応募者が参加しにくい結果となり、且、上記たてまえによって選択をしなかったためである。この点、講師、研修生ともかなりやりにくい面があった。しかし、講演、講義、実技とも非常に熱心に受講されており、特に研究討議では時間の不足を全員が感じたようである。また二十二日には、剣岳頂上より二百m下の岩壁で怪我のため前夜から動けないでいた登山者の救出活動を行なう一幕もあって、安全登山の重要さを痛感した。

女子登山指導者研修会

実行委員会

なお婦人懇談会から実行委員として次の方々が参加された。(順不同)

村井米子、川森左智子、小倉董

子、山口節子、奥川雪江、須田紀子、三浦多美子、黒石恒、渡辺節子、松田柳子、関田美智子。

岡部さんへのお舞金募集

去る八月十一日の集中豪雨のため、会員岡部浩子さんが黒部で行方不明となり現在まで何の手がかりも発見されておりません。（既報）

岡部さんは婦人部や会の行事でいつも活躍していました。できればご家族にお見舞を差上げたいと思いますので、ご協力下さるようお願いいたします。

一口　五百円
十一月末日まで　事務局へ

学生山岳連盟設立総会

先月号でお知らせした全日本学生山岳連盟の設立総会が、十月四日午後二時から東京大学の山上会議所で開かれ全国的な学生の登山団体が誕生した。

学生部指導委員会委員長の藤井運平氏、日本山岳協会副会長の小島六郎氏の祝辞に続いて、日山協への加盟の見通しなどについての説明がなされた後、議長に学生部委員長の久新大四郎君（早大）が選出され、規約の検討に移った。学生部の委員が中心となって作成した規約案がほぼそのままの形で採択され、初代委員長に久新君が就任し、全日本学生山岳連盟の設立が認められた。この連盟には、全国九ブロックから約百校の大学山岳部が加盟を申し出ているが、当日の出席校は三十数校であった。なお本部は、当分の間日本山岳会内に置かれる。

事務能力上の問題、あるいは財政上の理由などから、さしあたっての連盟の機能は、懇親と資料の交換、情報の収集などに限られよう。しかし規約には、その目的として「大学山岳部の共通の利益と、自由なアルピニズムを守る」とあり、近い将来、その趣旨にそった活発な活動が開始されるものと思われる。（浜野）

会員名簿訂正

二三ページ　奥川雪江の項電話局番（六七一）は（六六六）の誤り
二四ページ　長田建一の項……新庄家……は……新在家…の誤り

ルーム日記

1日（月）常務理事会
4日（木）定例理事評議員会
8日（月）常務理事会
11日（木）第二五四回小集会「日大グリーンランド横断の記録」
12日（金）女子登山指導者研修会講師打合会
18日（木）図書委員会
婦人懇親会
19日（金）ネパール研究のつどい
24日（水）常務理事会
25日（木）桜門山岳会理事会
26日（金）ネパール研究のつどい
30日（火）北大山の会
九月中来室者四三三名

「山岳」広告のお願い

「山岳」第六十四号は本年十二月刊行を目標に編集をすすめています。御高承の如く、巻末に広告を掲載しておりますが、この広告は「山岳」出版のための大きな財源でもあります。皆様により広告先の御紹介をいただきたくお願い申上げる次第です。お心あたりのございます方は事務局までお知らせ下さい。

▽広告料金（印刷黒一色）
普通1頁（縦12.5×巾18.0糎）　¥一五、〇〇〇
〃　1/2頁（縦12.5×巾9.0糎）　¥八、〇〇〇
〃　1/3頁（縦12.5×巾6.0糎）　¥六、〇〇〇
英文見返1頁　¥二五、〇〇〇
奥付見返1頁　¥二五、〇〇〇
裏表紙見返1頁　¥三〇、〇〇〇
（以上）

「山岳」編集委員会

あとがき　エベレスト登山準備もいよいよ軌道に乗り、連日夜遅くまで向井ビル四階の登山事務所は準備に忙殺されています。図書委員会の「第二回図書交換即売会」は盛況のうちに終わりました。くわしくは次号でお伝えします。年次晩餐会での恒例の「この一本展」も乞御期待。（山崎）

昭和四十四年十一月十日発行
東京都千代田区神田錦町三―二三　向井ビル
発行所　社団法人　日本山岳会
編集代表　山崎安治
（293）七四四一
振替口座東京四八二九番
印刷所　東京都港区赤坂一丁目三番六号　株式会社　技報堂

☆会報製本御引受け☆
製本代　（201号～250号）金600円也
送料　別受け　金120円也
中林製本手帳株式会社
東京店・文京区水道2～15，電話（943）0311（代表）
大阪店・都島区相生町7，電話（352）3491（代表）
名古屋店・昭和区雪見町1～15，電話（731）7331（代表）
工場：大阪工場（堺市），東京工場（戸田町）
▶背文字その他については往復はがきで日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい◀

山岳保険に入りましょう!!
●貯蓄にもなります。
●万一の場合にはひとの迷惑を軽減します。
御相談は　日本団体生命　へ
角筈支部（専門取扱営業所）
東京都新宿区角筈1の844　新光ビル内
電話（352）1556・1557